

《特集》文化のリソースとしての身体

「身体資源」とは何か

——特集への序——

菅原和孝*

「資源」の予備的な定義

この特集の出発点となるのは、身体を「資源」(resource)として捉えるという視角である¹⁾。この視角を説明するための準備として、「資源とは何か?」という基本的な問いに取り組まなければならない。いささか月並みだが、「無人島」への漂着者(仮に男とする)を思考実験の素材としよう。彼が生き延びるためには、島に自生するココヤシの実を採り、島に棲息するイグアナを捕獲しなければならない。ココヤシもイグアナも、彼の生存を支えるために利用される資源となる。「資源」とは、行為主体にとって「有用な物」のことである。だが、これはあまりにも自明なことである。

発見に資する視点は、もうひとりの人間(仮に女とする)が同じ島に漂着するという状況を想像するところから切り拓かれる²⁾。彼は話し相手を必要としていたから、彼女を助けようとする。そこで、イグアナの肉やヤシの実を彼女にさしだす。このとき、肉や実という物質それ自体だけでなく、「彼が彼女にそれを与えた」という行為もまたこの二人にとって「良いこと」になる。ここから、暫定的につきのように定義してみよう。「資源とは、二人以上の人間にとって良き事/物のことである」³⁾。さらに、人類

学者(または社会学者)としてのわれわれは、「二人以上の人間」というもってまわった言いかたよりも、「共同体」という語を使うことのほうに魅力を感じるであろう。

「身体資源」の定式化

それでは、「身体が共同体にとって良き事/物になる」というのは、どんな状況だろう。この特集の母体になる研究活動を支えているのは、「資源人類学」と略称されるプロジェクトである。プロジェクトの構成員が集まった総会の席で、ある文化人類学者が私に言った。「身体資源の典型は、奴隷ではないか」と。同様に、首狩りの犠牲者は、「首狩り族」にとってもっとも貴重な身体資源であるということもできるだろう。もう少し穏当な例を挙げるならば、出口顕を中心として組織された「人体部分の商品化と流通の研究プロジェクト」⁴⁾が焦点をあてている臓器移植や生殖医療にかかわる問題群こそ、共同体(またはより大きな社会)にとって「良き物」として立ち現われる身体資源の位相を端的に示している。さまざまな社会=経済的な文脈において、身体が対象化され、その物質的属性が利用されたり収奪されたりすることは、われわれの生の紛れもない現実である。それと同時に、われわれの実存的な身体は、つねにさまざまな

* 京都大学大学院人間・環境学研究科

対象化の圧力に抗いつづけ、それ自身に課せられた限界を乗り越えようとしている。身体を対象化する力と身体がそれ自身を越え出ようとする運動とのあいだに生じる弁証法的な緊張関係のなかで、身体の「資源性」(resourcefulness)を捉える必要がある [cf. WIDLÖK 2005: 18]。

ここで、本特集のタイトルに用いた<リソース>という語に組みこまれた二つの意味を思い起こさなければならない。つまりそれは、利用可能な「物」とであると同時に、なんらかの実践のための「手段」でもある。この二重語義と先の無人島の思考実験とを結合させるならば、「身体資源」をつぎのように定義できる。

(イ) 広義の身体資源とは、共同体のある成員(たち)によって担われ、他の成員(たち)に対して良き事をもたらす身体的な実践の総体である。

(ロ) 狭義の身体資源とは、(イ)のような実践の結果として、共同体にとって良き物として立ち現われる「だれかの身体」の物質的特性のことである。この「だれか」とは共同体の成員でなくてもかまわない。

つぎに、いくつかの民族誌的な文脈を参照しながら、この定式化にもっと具体的な内容を与えよう。

身体資源の狩猟モデル

身体資源の原型となるモデルを、グイ・ブッシュマンの男たちが1980年代初頭まで行っていた、弓矢猟にみることができる。定住化以前の遊動生活においては、毒矢を使って大型の偶蹄類をしとめることが、肉を獲得するもっとも重要な手段であった。足跡をたどって獲物を発見し、近距離に忍びよって矢を射かけるまでの作業は、単独でなされることが多かった。ハンターは、獲物が逃げた方向を見定めてからいったんキャンプに帰り、翌朝、同じキャンプに住む仲間の男たちとともに傷ついた獲物を追跡し、追いついてとどめをさしてから解体し、肉を

キャンプに持ち帰った [TANAKA 1980: 31-32]。この一連のプロセスを抽象化することにより、つぎのようなモデルを得る。

<行為主体> (以下、単に「主体」と略す) は、ある<コミュニケーション域>に属している。コミュニケーション域とは、主体によって「ことばが通じる」と想定される他者たちの集合に投射される心的な領域である。これに対して、実際にある空間的領域を共有し、しばしばそのなかに相互扶助の網の目がはりめぐらされているような人びとの集合を「共同体」と呼んで区別する。ブッシュマンの場合は、キャンプと呼ばれる居住集団が、この「共同体」に対応する。コミュニケーション域と共同体は必ずしも一致しない。たとえば幼い子どもは、共同体の成員ではあるとしても、おとなたちと同じコミュニケーション域に属しているとはいえない。さて、狩猟という活動に例示されるように、主体の欲望は、この域の外部に位置し、自らの自律した意図と意志をもって行動する<他者>に対して向けられる。そして、同じコミュニケーション域に属する<仲間>との協同を通じて、その他者の身体を対象化し、その物質的な資源性を利用するのである。

即物的にいえば、この場合の身体資源とは、殺戮され解体され肉と化して人びとの胃袋を満たす動物のことである。動物をも人間と同じく<他者=身体>として捉えることは、奇矯な発想と思われるかもしれない。しかし、人間身体と同じく動物身体もまた「ナマの素材」として有用だというわけではなく、ある関係性のなかでこそ初めて資源性を獲得する [WIDLÖK 2005: 29]。この点は、いくら強調してもしすぎることはない重要な論点である。キャンプにもたらされる「肉」とは、獲物を殺そうとするハンターの意図と、逃げのびようとする動物の意図とが対向しせめぎあう相互作用の見聞違いのような帰結である。言いかえれば、「肉」とは、コミュニケーション域の外部に位置する他者の意図をハンターの意図が打ち負かしたという事

実を「有形」化しているからこそ、共同体にとって「良き物」となるのである。これと同様に、移植される臓器も、ナマの素材として意味をもつわけではなく、「ドナー（またはその家族）の同意」といった、人間の意図と意志を刻印されることによってはじめて正統性をおびた資源になるといえる。

狩猟モデルの変形

グイの年長男性の語りから、過去に散発的な略奪婚が行なわれていたことを示唆する証拠がいくつか得られた [菅原 2004:149-160]。結婚適齢期を過ぎた仲間の男がいるにもかかわらず、周囲には配偶者として適当な女がない場合、男たちは謀議をこらして遠くのキャンプを襲撃し、目あての女をさらってきた。襲撃される人びとも同じグイであり、親族関係をたどれることさえあった。それゆえ、標的にされた女は、本来、略奪者たちと同一のコミュニケーション域に属していたにもかかわらず、そこからいったん排除されたとみなすことができる。また、複数の略奪者は、妻を獲得することを切望する未婚男性（原主体）の代理人としてふるまったといえる。さらわれた女たちの多くは略奪者の隙をついて脱走をはかることが多かったようであるが、もし彼らの共同体に「妻」として居つくなれば、彼らと同一のコミュニケーション域に復帰したことになる。だが、その場合でさえも、略奪者によって享受される彼女の身体の資源性は物質的なものである。なぜなら、略奪のそもそもの動機が「妻」を獲得することであり、その場合の「妻」とは生殖と労働の担い手であることを第一義的に期待されているからである。

モデルの拡張（その1）—民俗芸能の伝承—

民俗芸能の伝承という文脈に注目することによって、「身体資源の狩猟モデル」は大きく拡張される。芸能とは複雑な身体技法の複合体であ

る。あるコミュニケーション域の内部において、年長の熟練者から年少の初心者へと技法の受け渡しが繰り返される。主体としての視点を初心者にとるならば、彼が欲望を向けているのは、〈仲間〉たる熟練者の身体から繰りだされる「無形な」(intangible) 属性である。さらにまたこうした芸能活動が、たとえば「五穀豊饒祈願」といった儀礼の一環として執り行われるならば、共同体にとって「良き事」をつくりだす身体の資源性は、「舞を神さまに奉納する」といった文化的表象または象徴的観念と結合したかたちで生成する。そればかりではない。たとえば、初心者は今まだ幼い自分の息子が、ゆくゆくはこの活動に参入することを期待するであろう。このコミュニケーション域の共時的な平面よりもさらに「深い」層には、リクルートされるべき〈潜在的な仲間〉たちが無数にひしめいているのである。

拡張モデルの応用

この拡張モデルは、多様な民族誌的文脈に適用することが可能である。たとえば「武道教室」の鍛練は、コミュニケーション域の外側で遭遇するかもしれない〈他者=敵〉に打ち克つという潜在可能性を志向しつつ組織されるだろう。シャマニズム的な「治療儀礼」においては、精霊に代表されるような文化表象と結合したかたちで、仲間たちの病を治すというきわめて実際的な目標に向かって、身体の資源性が効力を発揮することになる。ただし、この場合には、共同体とコミュニケーション域との折り重なりあった関係は、今までに想定したどの文脈よりも複雑なものとなる。シャマン（治療者）と依頼人（患者）は、精霊信仰を共有するという意味で同一のコミュニケーション域に属すと同時に、同じ「村落共同体」の成員であるかもしれない。だが、依頼者は別の共同体から訪れることもあるだろうし、極端な場合は、まったく異なった信仰を抱いているにもかかわらず、ただ

「病気治し」の評判だけを聞きつけて来訪するかもしれない。同時に、シャマンとその弟子たちは、他の村人たちにはアクセスできない閉鎖的なコミュニケーション域を共同体の内部に維持しているであろう。

モデルの拡張（その2）—語りと記憶—

最後に取りあげる民族誌的な文脈は、年長者が、彼よりも年若い「観客」にむかって、過去の出来事を語るという場合である。もしこの観客のなかに人類学者を含めるならば、この例は、フィールドワークの（少なくとも一本の）柱をなす「インタビュー」状況と合致する。無文字社会においては、「過去の出来事」はつぎの二つのかたちでしか存在しない。(a) その出来事に参与した人びとのそれぞれが抱えている心的表象の束、(b) その人びとのだれかが語るという行為を通じて受肉される公的表象の束⁵⁾。われわれは (a) に接近する手段をもっていないから、当然 (b) に注目するしかない。(b) の意味においてこそ、口頭言語（話しことば）は、過去の出来事にとっての〈身体〉となるのである。語り手が記憶を外化しようとする努力はつねに成功を約束されているわけではない。そこから産出される公的表象は、楽しさ、驚き、感嘆、興奮、恐怖といった情動的反応を観客のがわに喚起するときこそ、この観客（つまり同一のコミュニケーション域に属する仲間）にとって「良き事」となる。そのとき、語りを「聞きたい」という欲望、あるいは、過去の出来事のなかに渦巻いていたさまざまな意志や意図や欲求とみずからを同一化させたいという欲望は、世界を新しく意味づけなおすという身体の「無形の」資源性へと向かっているのである。この意味において、語るという行為によって受肉される過去の表象は、共同体によって享受され継承される身体資源となる。しかも、このような資源性は、「いまここ」の文脈において語り手と聞き手とのあいだで進行している絶えまない交渉

のなかから生成するのである。

この特集は、民俗芸能における身体資源の再配分、身体技法の理論的再検討と武道教室での実践、シャマニズムという特異な身体技法の現代の変容、そして過去の生業活動に関する語りによって照射される記憶の構造、という4つの主題をあつかっている。著者たちのすべてがここで提示した身体資源のモデルに同意しているわけではないが、4篇の論文は、この序論の構成にしたがって配列した。

付記

この特集に収めた論文のうち菅原他・著を除く3篇は2004年9月27～29日に京都で開催された国際ワークショップ‘The Distribution and Construction of Body Resources’で発表された草稿を原形としている。これらの草稿は改訂され論文として刊行されたが、この特集のために各著者はさらに全面的な改稿をほどこした。上記ワークショップの開催と論文集の刊行は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究『資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築』（領域番号606 内堀基光領域代表者）の総括班、および計画研究『身体資源の構築と配分における生態、象徴、医療の相互連関』（課題番号14083205 菅原和孝研究代表者）から資金を得て行なわれた。

注

- 1) 本稿は、英語の別稿を全面的に改稿し、短縮したものである。本特集の背景をなす、人文科学における「身体論」の流れを概説することは省略したので、関心のある読者は別稿を参照されたい[SUGAWARA 2005]。
- 2) クッツェーの小説は「ロビンソン・クルーソー」の翻案によってこのような状況を設定し、言語・コミュニケーション・物語の可能性（あるいは不可能性）について驚くべき思考実験を行なっている。この作品はスピヴァクによっても詳しく分析されている[クッツェー 1992;スピヴァク 2003]。

- 3) ここで「良い」「良き」(good)といった形容詞で表わされる意味場は、もちろんきわめて直観的に把握されており外延の不確定なものである。ただし、レイコフとジョンソンは、道徳の源泉をなす「良くあること」(well-being)の概念が、人間の直接経験に根ざした普遍的なものであるという可能性を示唆している。具体的には、病よりも健康が、隷属よりも自由が、孤立し・傷つき・無視されていることよりも社会的に結合し・庇護され・気づかわれていることのほうが「良い」、等々[LAKOFF & JOHNSON 1999: 291]。
- 4) このプロジェクトの一環として、2004年8月3日に東京大学において“The Anthropology of Human Body Parts as Commercial Re-sources”と題する国際ワークショップが開催された。
- 5) 心的表象(mental representation)と公的表象(public representation)の区別についてはスベルベルが論じている[SPERBER 1996]。

参考文献

クッツェー, J. M.

1992 『敵あるいはフォー』本橋哲也訳、白水社。

菅原和孝

2004 『ブッシュマンとして生きる——原野で考えることばと身体——』中央公論新社。

スピヴァク, G. C.

2003 『ポストコロニアル理性批判——消え去りゆく現在の歴史のために——』上村忠男・本橋哲也訳、月曜社。

LAKOFF, George & Mark JOHNSON

1999 *Philosophy in the Flesh: The embodied mind and its challenge to Western thought*. Basic Books.

SPERBER, Dan

1996 *Explaining Culture: A Naturalistic Approach*. Cambridge University Press. (スベルベル、D. 2001 『表象は感染する——文化への自然主義的アプローチ』菅野盾樹訳：紀伊國屋書店)

SUGAWARA, Kazuyoshi

2005 Introduction: Toward the anthropological understanding of body resources. In *Construction and Distribution of Body Resources: Correlations between ecological, symbolic and medical systems*. Kazuyoshi Sugawara (ed.), pp. 1-6, RILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.

TANAKA, Jiro

1980 *The San, Hunter-Gatherers of the Kalahari: A Study in Ecological Anthropology*. University of Tokyo Press.

WIDLAK, Thomas

2005 The Relational Resourcefulness of the Body. In *Construction and Distribution of Body Resources: Correlations between ecological, symbolic and medical systems*. Kazuyoshi Sugawara (ed.), pp. 18 - 29, RILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.

(2005年7月12日採択決定)